

主体的・対話的で深い学びに関する研究

校内研究への支援の在り方

－教員一人一人の授業改善につながる校内研究を目指して－

副主幹・指導主事 笠井 さゆり 主 幹・指導主事 平沼 公香
副主幹・指導主事 興水 美香 副主査・指導主事 萩原 義晃
指導主事 廣瀬 雅美

キーワード みんなわくわく校内研究 みんなが主役の校内研究 分析結果を生かした授業改善

I 主題設定の理由

総合教育センターの機構改革に伴い、平成30年度より立ち上げた、研究協力校と協同的に「授業づくり・学校づくり」を推進する実践研究を今年度も継続する。これは、本センターが各学校に対してどのような支援を行うことができるかを探るものである。

各学校では学校や地域の特色を生かした校内研究を推進している。しかし、教育課題が多様化・複雑化する教育現場において、校内研究の進め方に多くの学校が様々な悩みを抱えており、研究の成果が教員一人一人の授業改善につながっていないケースが見られる。そこで本研究では、支援の在り方を探るにあたり、みんなが主役となる校内研究、教員一人一人の「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」につながる校内研究に着目していく。

小学校チームは、今年度、昨年度からの研究協力校である富士川町立鯉沢小学校に加え、新たな研究協力校として笛吹市立石和南小学校とも連携を図る中で研究を進めた。同一研究協力校で複数年にわたり協同研究を進めることで、より系統的・計画的な実践の構築の可能性を探ることを意図している。具体的な取組として、各校からの要望を踏まえ、本センターの機能を生かした各種学力調査の分析に基づく提案等を行い、研究協力校における校内研究の活性化を目指す。更に、研究内容を県下に広げ、各学校の校内研究の活性化につなげるとともに、各学校への有効な教育支援の在り方を探りたいと考える。

II 研究の目的

研究協力校からの要望に加え、本センターの機能を生かした各種学力調査の分析に基づく提案等が、研究協力校に対してどのような成果と課題をもたらしたかを検証することで、各学校の校内研

究への支援の在り方を探る。

III 研究の方法

- ・校内研究の運営に関する連絡を密にし、管理職や研究主任と連携する。
- ・学習会、学習指導案検討、研究授業、研究会において、情報提供や指導・助言をする。
- ・各種学力調査の分析結果を生かした授業改善の在り方について提案する。
- ・「明日の授業に生かすシート」（資料2参照）の活用を促し、一人一人の授業改善に向けた具体的取組につながるような支援を行う。
- ・拡大校内研究会やセンター研究大会、新研究主任研修会等において、研究の成果を発信する。
- ・検証の手立てとしてアンケートを実施し、教員の変容を把握する。

IV 研究経過

1 センター研究日

4月12日(月) オリエンテーション

4月22日(木) センター研究

- ・研究計画の検討
- ・研究の方向性や支援内容の確認
- ・学校訪問計画作成

5月19日(水) 研究計画発表会

6月22日(火) センター研究

- ・1学期の支援内容の検討

7月14日(水) センター研究

- ・2学期の支援内容の検討

9月21日(火) 中間発表会

10月19日(火) センター研究

- ・2学期の支援内容の検討

11月11日(木) センター研究

- ・3学期の支援内容の検討

11月19日(金) 山梨大学連携教育研究会

12月21日(火) センター研究

・アンケート結果の検討

1月18日(火) センター研究

・所内発表会の検討

1月24日(月) 所内発表会

2月7日(月) センター研究

・研究紀要の検討

2月22日(火) センター研究大会

2 学校訪問

鰯沢小	石和南小
4月14日(水) ・委嘱状交付 ・学習会	4月16日(金) ・委嘱状交付
5月31日(月) ・学習指導案検討	5月10日(月) ・学習会
6月16日(水) ・一人一実践授業	6月7日(月) ・学習会(自校採点)
6月30日(水) ・研究授業	6月14日(月) ・学習指導案検討
7月14日(水) ・学習会(自校採点)	6月28日(月) ・研究授業・研究会
8月23日(月) ・学習指導案検討	7月8日(木) ・一人一実践授業
10月6日(水) ・一人一実践授業	8月3日(火) ・学習会
10月27日(水) ・拡大校内研究会	9月6日(月) ・指導案検討
11月22日(月) ・一人一実践授業	10月1日(金) ・一人一実践授業
11月24日(水) ・一人一実践授業	10月4日(月) ・一人一実践授業
2月8日(火) ・一人一実践授業	10月6日(水) ・一人一実践授業
3月2日(水) ・学習会	10月20日(水) ・学習指導案検討
	10月21日(木) ・一人一実践授業
	10月26日(火) ・一人一実践授業
	11月1日(月) ・拡大校内研究会
	11月5日(金) ・一人一実践授業
	11月9日(火) ・一人一実践授業
	12月3日(金) ・一人一実践授業
	2月7日(月) ・学習会

V 具体的な取組

小学校チームでは、2校の研究協力校の実態と要望に沿った支援を行い、それぞれの校内研究が活性化されるように努めてきた。今年度は、教員一人一人の授業改善につなげ、学校全体の授業力向上を目指すことを主軸に、本センターの機能を活用しながら、研究協力校に具体的な支援方法を示しながら進めてきた。

研究協力校では、新型コロナウイルス感染防止対策のもと、センター指導主事の訪問とオンライン訪問とを状況に応じて設定し、授業改善に向けた歩みを推進することができた。

1 研究協力校のニーズに応じた柔軟な支援

本チームでは、研究協力校のニーズに合わせてセンター指導主事を校内研究会に派遣している。校種の枠を超えた指導主事で構成されているため、様々な視点からの指導・助言が可能である。また、本チーム以外に情報教育部や相談支援部の指導主事に指導・助言を依頼することもできるので、ニーズに沿った支援を行うことが可能である。

センター指導主事は、学校教育実践を専門的な見地から支援する立場であるということを確認しつつ、教員の校内研究への前向きな意欲を喚起し、積極的な取組を、全校体制で継続できるように支援している。

(1) 授業力向上に向けた支援 ～石和南小学校～

石和南小学校は、令和3、4年度笛吹市教育協議会の研究指定校となっており、校内研究テーマ「ともに考え 深く学ぶ 子どもの育成」のもと、来年度の公開研究会に向け、全教員の授業力向上への支援を必要としていた。

そこで、校内研究の年間計画の中で、センター指導主事がどのように関わるか、管理職や研究主任と話し合った。第1回校内研究会では、センター指導主事も参加し、研究協力校としての具体的なイメージを全教員と共有した。学校が主体となって研究をスタートすることができた。

まず、新年度の職員体制でこれまでに積み上げてきた授業づくりを共通理解するために、研究授業(国語科)が行われた。授業後に行われた研究会では、研究授業から得られる成果を、個々の授業づくりに反映させられるよう、一人一実践の取組を行うことを確認した。これは、昨年度までの

研究協力校が一人一実践の取組を行い、成果を上げていたことから、同様に取り組みたいとの要望があったものである。この取組は、学習指導案(略案)づくりから支援にあたり、当日の授業を参観し、授業後の休み時間に指導・助言を行うという流れである。これは、本チームがこれまでの研究協力校への支援を行う中で確立してきたスタイルである。通常の授業に指導主事が関わることで、学級担任は授業づくりに関する指導・助言が得られる。更に、日頃の実践の悩みを相談しやすくなり、授業実践への意欲の向上にもつながる。日常の授業改善が、学校全体としての授業力向上に繋がる取組となった。

石和南小学校では、以下の授業を行った。合計7つの教科・領域での実践となり、他チームの指導主事にも派遣要請を行い、指導・助言を行った。

学年等	研究授業	一人一実践
1年		道徳
2年	特別活動	
3年		算数・音楽
4年		国語
5年	国語	道徳
6年	算数(拡大校内研)	
特支		国語・外国語
教務		理科

特別活動の研究授業の際は、山梨県学校教育指導重点に示されている学習指導と生徒指導は両輪であるという方針を基に、学級経営への取組に関して共通理解を図ることができた。今後も教科だけでなく学級集団づくりへの支援も行っていく。

(2) 継続した支援 ～鯉沢小学校～

鯉沢小学校は、校内研究テーマ『『確かな学力』を身に付け、生き生きと学び合う児童の育成～算数科の学習における『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指して～』のもと、研究を進めた。

研究協力校1年目に、センター研究は、教員とセンター指導主事が協同して授業をつくることをとおし、学校全体で授業改善を目指す取組であるという意識をもてるようにした。研究協力校2年目となり、管理職のリーダーシップの下、研究推進に対する具体的なイメージが全職員で共有されていた。そのため、研究会では建設的な意見交流が行われ、教員一人一人がより積極的に参加でき

る校内研究となった。学校が主体となって研究を進め、センター指導主事がよりよい研究になるように支援する体制を整えることができた。

鯉沢小学校は、今年度、一人一実践の授業を研究授業として校内研究に位置付け、それぞれの授業を全職員で見合い、研究討議を行った。昨年度取組でよさを実感した板書や学習感想についても、継続して取り組んだ。学習指導案作成時には、予想される児童の反応例を考え、板書計画を実際に板書することを大切にしてきた。研究会では児童の発言やノート記述をもとにした意見が多かった。6本の授業を見ることにより、教員の授業を見る視点、討議する視点が明確になり、授業づくりに対する共通理解が高まった。「子供に学ぶ、板書に学ぶ、学級づくりに学ぶ。いずれもこの校内研で達成できていると思う」という教員の感想からも、研究協力校の校内研究に対する達成感が伝わる。一人一実践の授業を全職員で参観し、互いに意見し合う体制が整った鯉沢小学校では、みんなが主役となった校内研究となった。

センター指導主事は、学校の要望を受け、指導案検討から研究授業当日まで指導・助言を行った。全担任の授業研究を支援することが、学校全体としての授業力向上に資する取組となった。

今年度、新型コロナウイルス感染防止の対応下においても研究を継続できるようにICT機器を活用した。具体的には、研究授業と研究討議をオンライン会議システムで行った。リアルタイムでの授業参観、付箋機能を活用した画面上での研究討議への参加、指導主事による指導・助言ができる体制は、日々の授業研究の歩みを止めることなく推進することにつながる。今後も状況に応じて活用していく。

(3) 拡大校内研究会の実施

拡大校内研究会の実施をとおして、研究協力校は、他校や異校種の教員と討議し、研究がさらに深まるようにしている。センターは、校内研究への支援の様子を発信し、県内の各学校の校内研究推進に資する機会としている。

ア 授業づくり

「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」に基づいて、授業者や学年・ブロックの教員とセンター指導主事が協同して学習指導案検討

を重ねたり、授業者が行う模擬授業に参加して構想を練り上げたりした。特に、予想される児童の反応を入れた板書計画を立てることで、授業展開を具体的にイメージするなど、共通理解の下、授業づくりを進めた。

イ 研究討議 ～「対話リフレクション」による振り返り～

研究討議に先立って「対話リフレクション」を行った。「対話リフレクション」とは、授業者の振り返りを反省の弁にすることなく、授業者の意図をメンター役の教員と問答形式で示すことで、その後の研究討議の視点が明らかになり、討議の活性化につながるものである。この形態は、昨年度、鯉沢小学校の拡大校内研究会で実施したところ、多くの参加者から、自校の実践に取り入れたいと好評であった。今年度も、両校で取り入れたところ、参加者からは、「授業者の指導意図がわかり、とてもよかった」「自校の授業研究会でも取り入れたい」といった声が挙げられた。今後、他校の実践に広がるのが期待できる。

ウ 新研究主任研修会の現場研修としての役割

新研究主任研修会の現場研修として、研究協力校が実施する拡大校内研究会への参加がある。新研究主任は、授業内容を討議することに加え、研究会の進め方を研究協力校のファシリテーターから学ぶことができた。また、異校種からの参加もあり、小学校教員の視点にはない意見が出され、系統立った指導の重要性を再確認することができた。研究会後のアンケートには、「学校で協力している姿やみんなで研究を行っている姿がとてもよかった」という記述があり、全校体制で研究授業に取り組む良さも周知できたといえる。

研究会での指導・助言は、担当してきたセンター指導主事が行った。今年度は山梨大学のアドバイザーの先生方に指導案検討から関わっていただけたので、当日の指導・助言をさらに充実したものにすることができた。

エ 運営に関する支援

初めて拡大校内研究会を行う研究協力校にとって、研究会を運営することは不安に感じる部分がある。そこで、運営方法やタイムテーブル、研究討議の進め方などを提案したり、日頃の校内研究

会にワークショップ型の研究討議を取り入れたりと、研究協力校の教員が拡大校内研究会に対して見通しをもつことができるようにした。また、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染防止対策が重要となったため、研究協力校が安心して開催できるように、事前準備や対応について連絡調整を行った。研究協力校は、開催場所や参観方法を工夫し、センター指導主事は、受付や参観時等の予防対策を徹底して行うなど、丁寧な対応を行うことで参集型での拡大校内研究会を実施することができた。参加者からは、「久しぶりに生の授業を見て、とてもわくわくした」「久々の生の授業参観で空気感が感じられた。全体の様子が見取れ、ありがたかった」「顔を合わせての研究会で大変嬉しく思った」といった声が多く聞かれた。感染症対応や多忙化改善等でこれまでの学校の在り方が問われている中、授業改善への歩みは止めない各校の先生方の熱い思いに触れることができた。研究協力校の取組を発信していくことの有効性を改めて実感することができた。

(4) 学習会等における講師派遣

今年度も授業力向上に向けた様々な学習会を行った。夏休みには情報教育部の指導主事とともに、算数科での活用体験をはじめとした一人一台端末の授業での活用に向けた研修を実施した。この学習会は、2学期からの積極的な活用に繋がった。

また、研究協力校の一人一実践の取組の中に、特別支援学級での実践を含めている。今年度、3学級で実施するにあたり、教科担当指導主事からの指導・助言に加え、相談支援部の指導主事に指導・助言を依頼した。該当児童の支援方法を中心に、特別支援学級で行う授業での発問や活動への支援について学ぶ機会となった。

こうした講師派遣は、研究主任の校内研究運営に関わり、学習会の講師選定に役立つ支援となる。各教科・領域等の専門性の高いセンター指導主事を中心に、研究協力校が希望する内容に沿った講師を派遣する支援は、今後も継続していく。

2 分析結果を授業改善に生かす

(1) 自校採点の実施

本センターでは、以前より、全国学力・学習状況調査(以下「全国学調」)実施後に自校採点を行い、各学校での授業改善に活用することを推奨し

ている。小学校チームは、令和（以下R）元年度より、研究協力校において、自校採点を校内研究に位置付け、授業改善の取組につながるよう支援してきた。

そこで、各研究協力校は、R3年度の全国学調の自校採点及び分析を行った。鰍沢小学校では、1学期末の校内研究会で、全教員が算数調査の自校採点を行った。石和南小学校では、全国学調実施直後の校内研究会で、全教員が国語・算数調査の自校採点を行った。その際、センター指導主事は採点のポイントを示したり、教員からの疑問に答えたりした。

自校採点後には、「解答を類型に分けるので、子供がつまずきやすいポイントが把握できた」「自校の成果と課題がみえてくる」という感想があった。自校採点を行うことによって、全国や山梨県などの全体的な結果の報告だけではみえてこない、目の前の児童の実態が明らかになるといえる。

また、「どのような力を身に付けさせていくことを目指しているのかがみえてくる」という感想があった。採点することにより全国学調の出題意図が把握でき、そこから児童にどのような資質・能力を身に付けさせることが求められているのかを知ることができる。

更に、「採点をした教師は成果や課題がよくわかるが、採点に関わらないほとんどの教師にはなかなか伝わらない」「全教職員で採点する機会がもててとてもよかった」という感想があった。前述したように、今年度はそれぞれの研究協力校で校内研究の一環として自校採点に取り組んだ。そのため、「全学年の担任が、どのような力を身に付けさせていけばよいか、どのような課題があるのかを共通理解」することができた。

両校において、自校採点を行った成果として、自校の児童の学習状況を分析・把握し、課題を見だし、共通理解を図る機会となったことが挙げられる。これにより、全教員が共通認識をもって校内研究に参加し、学校全体で授業改善に取り組むことができる。

（2）算数科における課題

これまでに実施された全国学調の結果から、小学校算数における経年的な課題がみえてくる。

例えば、平成（以下「H」）25、28、30年度の全国学調では、式の意味の理解に課題があると指摘

されている。H30年度全国学調の報告書ではその結果を受け、「式の意味を問題場面や図と関連付けて捉える」ことや「求めた商の意味を考え、その数値を比較する活動」が大切であると記されている。

一方で、単位量当たりの大きさに関連した問題にも課題が多くみられる。H25、30年度全国学調では「単位量当たりの大きさを求める式と商の意味を理解することに課題がある。」と指摘されている。その設問と出題の趣旨が同じ設問が今年度の全国学調にも出題された。全国における正答率をみると、H30年度は50.3%、R3年度は56.0%となっており、5.8ポイント高くなっている。しかし、山梨県における正答率の上昇は0.7ポイントであった。山梨県においては依然としてこの課題が改善されていないといえる。

また、割合も経年的な課題といえる。H27、28年度の全国学調では、「課題等の主な特徴」として「基準量、比較量、割合の関係を正しく捉えることに依然として課題がある」と指摘されている。学習指導要領改訂にあたり、算数科において「C変化と関係」の領域が新設された。これは「事象の変化や関係を捉える力の育成を一層重視し、二つの数量の関係を考察したり、変化と対応から事象を考察したりする数学的活動を一層充実するため」である。経年的に課題がみられる単位量当たりの大きさや割合など、変化や関係を把握する力の育成が重要視されているといえる。

以上から、本センターは「式の意味の理解」、「変化や関係を把握する力」を課題として挙げる。

（3）算数科における授業改善例

これまでに、全国学調の問題を活用し、国立教育政策研究所から解説資料等、本センターから「各種学力調査を踏まえた授業改善に向けて」等、多くの授業改善例が示されている。国立教育政策研究所の資料等では、計算の結果を振り返って確かめる活動や計算するために数量の関係を図に表す活動を取り入れる必要があることが示されている。

また、本センターでは、日常生活の事象における量の大きさを、実感をもって捉える活動を取り入れる必要があることを示している。具体的には、授業中、児童がより身近な量に置き換えて量を解釈する場面や、目的に応じた単位で量の大きさを的確に表現したり比べたりする場面を設けること

が考えられる。

これらは、全学年の学習に共通して取り組める内容である。研究授業当日だけでなく、日々の授業を通して、教員が、算数の学習を基に考察したり、捉えたりする姿勢を示すことが大切である。なぜなら、児童が算数で学習したことを基に日常生活の事象を数量の関係に着目して捉え、数学的に表現・処理するようになることを考えるからである。

(4) 年間計画立案時における課題の提示

本センターは、前述の課題や授業改善例を年度初めに研究協力校に提示した。校内研究の年間計画立案時にどのような課題があるのかを知ること、課題に関わりのある単元で授業研究を行うことができる。これまで、研究授業を行う際に、授業を行う学年や教員を決めてから単元を検討する学校が多くみられたが、このような取組により、現状の算数科の課題に即した授業研究を行うことができるようになることを考える。また、課題解決に向けて全校体制で授業研究に取り組むことができる。

鯉沢小学校では、前述の課題である「式の意味の理解」に関わる学習として「あまりのあるわり算」(第3学年)を研究授業の単元とした。そして、計算の結果を振り返って確かめる活動や計算するために数量の関係を図に表す活動を取り入れた。

また、「変化や関係を把握する力」に関わる学習として、鯉沢小学校では「倍の見方」(第4学年)を、石和南小学校では「比例をくわしく調べよう」(第6学年)を研究授業で扱う単元とした。そして、両校とも、日常生活の事象における量の大きさを、実感をもって捉える活動を取り入れた。

(5) 課題・授業改善例を意識した授業づくり ア 授業改善例を具現化する

前述の授業改善例を実際の授業で具現化することで、研究協力校における授業改善につながると考える。そのため、課題となる単元や学習内容に関する授業づくりにセンター指導主事に関わり、育成したい資質・能力、指導法等について指導・助言した。

イ 学習指導案に反映させる

研究協力校では、全国学調からみられる経年的な課題に関わる単元を研究授業に設定し、授業改

善例を意識した指導意図を学習指導案に記述した。以下は、研究協力校が作成した実際の学習指導案から抜粋したものである。

問題の提示にあたっては、テープ図で提示し、それぞれのゴムの長さを視覚化する。二つの数量関係を見たときに、直感的にもっている子どもの量感を大事にし、直感で感じたものを数学的に説明できるようにどんなことがいえるのかを考えさせたい。

(鯉沢小第4学年算数学習指導案より抜粋)

このように学習指導案に明記したことで、授業者が学力調査における課題や改善策を意識しながら単元を構想し、授業実践を行うことができた。

ウ 県内への発信

鯉沢小学校(10月27日)、石和南小学校(11月1日)において、拡大校内研究会が行われ、合計2実践の授業が県内の教員に公開された。

拡大校内研究会の実施を通して、各種学力調査の分析結果を基にした授業改善例を研究協力校の教員が実践し、提案することができた。

研究会後のアンケートには、授業改善のための手立てについて、有効性を認める記述が見られた。以下は、鯉沢小学校拡大校内研究会アンケートの記述の一部である。

自校において、課題がある内容を研究授業にしているところがすごいと思いました。
生活の中にある題材を使ってよかった。
実物を見せたことがよかったです。
黒板に提示される資料や図などは視覚的に効果が高いと感じました。

3 作成物の活用

研究協力校の校内研究を支援するにあたり、これまでの研究で作成した資料である「授業研究の進め方」と「明日の授業に生かすシート」を今年度も活用した。今年度は、主として「明日の授業に生かすシート」について言及する。

(1) 「授業研究の進め方」とは

多くの学校で行われている授業研究を、PDC Aサイクルによって、一人一人の授業改善につなげるための手立てを示したリーフレットである。(資料1参照) 授業研究のPDC Aサイクルを「P指導案検討」「D研究授業」「C授業後研究会」

「A個々の授業研究へ」という過程で捉え、それぞれの過程におけるポイントを示している。

校内研究でこのリーフレットの活用を促すことで、学校全体として、教員一人一人が主体的に関わる校内研究を目指している。

特に、CからAの過程に重点を置いて取り組むことが大切である。リーフレットのサブタイトル～学んだことを個々の授業に取り入れよう！～にあるように、研究授業で明らかになった成果や課題を出して終わりにするのではなく、それを教員一人一人が自分の授業に取り入れていくことで、授業改善や校内研究の深まりにつながる。また、自分自身の授業に取り入れる視点をもって研究授業を見ることによって、より自分事として考え、主体的な見方もできる。

(2) 「明日の授業に生かすシート」とは

前述の「授業研究の進め方」で特に重視したCからAの過程に焦点を当てて作成した記述式のシートである。(資料2参照)

このシートには、「C授業後研究会」で明らかになった成果や課題、改善策を記述する項目、それを実際に自分の授業にどのように生かすかを考え記述する項目、学校や学年で検討していきたいことを記述する項目が設けられている。以上のような項目を教員一人一人が継続して記述することにより、CからAの過程を確実に結び付け、それぞれの具体的な授業改善、次のPDCAサイクルにつなげることを意図している。

(3) 実際の活用の様子

ア 石和南小学校での活用例

研究協力校1年目の石和南小学校では、年度始めの校内研究会において、上記作成物の説明を行った。「授業研究の進め方」の中で、特に意識したい点として、研究授業を自分自身の授業に生かしていく視点をもつことを挙げた。そして、その実践のために「明日の授業に生かすシート」に記述することが大切であることを伝えた。今年度は、研究授業、拡大校内研究会後の計3回実施した。

以下は、「自分の授業にどのように活用していくか」についての記述の一部である。

【6月】

単元全体を通して、子供たちが見通しをもって取り組めるワークシートを作成する。
--

学習の見通しが持てるワークシートを作成する。

板書の構造化を意識する。

【11月】

必然性を感じる学習課題を設定する。

個人の考えを可視化する。

比較するための問い返しをする。

6月には、「ワークシート」についての記述が多く見られた。各自が、これまでの自分の板書やワークシートを想起しながら授業を参観したことで、授業者の単元を見通したワークシートや本時の板書計画から、見通しをもった実践の重要性を認識したことがうかがえた。

11月には、「課題設定」についての記述が多く見られた。授業を通して、児童が学ぶ必然性をもって学習を進められるような身近な題材を教材化することで、効果的な課題設定を目指したいという内容が多く見られた。全体的に、6月段階よりも、授業改善に対する視点が具体的に記述されており、一人一人が自分の実践について課題意識を見だし、その解決の方策を具体的にイメージできていることがうかがえた。

イ 鯉沢小学校での活用例

研究協力校2年目の鯉沢小学校では、研究授業、拡大校内研究会後の計5回実施した。以下は、「自分の授業にどのように活用していくか」についての記述の一部である。

【6月】

児童が真剣になる課題を用意する。

児童の関心を引き出す学習課題を設定する。

問うことを明確にし、伝わるように問う。

【11月】

学習課題の設定や発問を工夫するとともに、その解決の過程で効果的な対話の場面を設定する。

学習感想を大切にし、学習課題の設定や児童の反応の予想に生かすようにする。

学習課題解決のために、問い返しをする。

6月には、「課題設定」についての記述が多く見られた。魅力的な課題設定を実現するために、児童の思考の見取りの重要性を実感したという記述が見られ、学習評価や学習感想の重要性について

再認識した様子うかがえた。

11月には、「対話的な学び」や「学習感想」についての記述が多く見られた。「魅力的な課題設定をすることで効果的な対話的な学びにつながる」「学習感想を取り入れることで、魅力的な課題設定につながる」など、6月段階に多く見られた「課題設定」を効果的に取り入れるための方策として「対話」や「学習感想」について着目している様子うかがえた。授業改善に向けて継続して課題意識をもち、改善に向けた具体的方策を考えていたといえる。このように、授業参観の視点や活用についての記述がより具体的になってきたのは、本シートを2年間、継続的に活用してきた成果である。

2校では、本シートの記述を研究主任がまとめ、校内研究会の中で共有するという取組も行っていった。共有することで、多様な視点から授業について再考することにつながった。

ウ 個々の授業に生かす

前述のように、「授業研究の進め方」で共通理解を図り、「明日の授業に生かすシート」を活用することで、研究の方向性を共有し、研究授業で明らかになった成果や課題を受けて個々の授業にどのように生かすかを考える様子うかがえた。

それに加えて、長期的に校内研究に関わることで、同一教員の変容をみることもできる。本シートの活用から実践へ反映させた、二人の教員の事例を以下に示す。

教員Aの6月の算数の授業研究会後の記述は次の通りであった。

授業研究で明らかになった「有効な手立て」や「改善策」は何でしたか？

- ・児童の言葉を使う、つなげる。教師はがまん！
- ・一番考えさせたいことを明確にして、時間配分を考えたり、授業を組み立てたりする。

明日からの授業や一人一実践等で、どのように活用しますか？

- ・子供が自分の考えを表現することを大切にし、子供の言葉でつないでいく。教師はつなぎ役、話し過ぎないように我慢する。間違っても、途中までも取り上げてみんなで考えていく。

そして、「一問一答にならないように、子供の考えをつないでいくことが難しい」という記述も見

られた。授業研究を通して、自身の実践を振り返り、「児童の言葉をつなぐことが必要」ということを感じ、自身の授業改善に向けた課題意識を明確にすることにつながっている様子うかがえた。

これに対して、11月までの授業研究会後の記述は次の通りであった。

授業研究で明らかになった「有効な手立て」や「改善策」は何でしたか？

- ・児童に身近な生活から題材を見つける。
- ・児童から生まれた疑問を解決に向けてつなぐ。
- ・児童が説明する。話す。
- ・児童の言葉をひろい、児童の考え方(思考の流れ)で授業を進めていく。
- ・一人の児童の考えをみんなで考え、解釈する。

明日からの授業や一人一実践等で、どのように活用しますか？

- ・児童の言葉、困り感をひろう。
- ・学習したことを生活と結び付けて生かせるように、授業を組み立てたり、日頃の関わりの中で声かけをしたりする。
- ・「伝えよう」という意図で話す機会を増やす。
- ・図と説明を結び付けて理解を深める。
- ・一人の児童の考えをみんなで考え、解釈する場面を設定する。

授業研究会後の記述を重ねるごとに、「児童に身近な教材の工夫」「児童からの疑問を引き出す工夫」「机間支援での見取りの視点」「図を活用した説明方法の工夫」など、児童の言葉をつなぐために必要な具体的事項に着目する記述が増えていった。教員Aは、年度初めに自身の授業改善に向けた明確な視点をもった上で、その後の授業研究会に臨んだからこそ、具体的にイメージすることができたのではないかと考えられる。

また、教員Bは、授業研究会後に、「児童から引き出したい言葉を明確にする」「引き出したい言葉を引き出すために発問を吟味する」「意図的な問い返しを取り入れる」と記述した。その後の教員Bの一人一実践授業では、児童とのやり取りを大切に、児童から言葉を引き出そうという意図が明らかに見て取れた。

このように、教員の意識の変容についても見取り共有することは授業改善への一助になったり、校内研究支援の有効性の検証につながったりする可能性が考えられる。

(4) 「明日の授業に生かすシート」の活用の有効性

校内研究支援の視点から、本シートの活用の有効性を3つに整理する。(3)に示したように、学習会や研究授業、授業研究会から、教員が学びや気づきを得ていたことを確認することができた。また、その学びや気づきが教員一人一人の授業改善に結び付いているか、どのように具現化されているかを知ることが可能であることがわかった。更に、個々の教員の記述について継続的に見ていくことで、個々や学校全体の授業づくりへの意識や具体的取組の変容についても把握しながら支援を行っていくことも可能であることがわかった。

研究協力校にとって、本シートの活用は、研究授業を単発で終わらせるのではなく、その後の授業改善につなげるための有効な手法の一つとなった。本シートは短時間で記述できることに加え、研究主題等を問わず、各校の校内研究に取り入れやすい。実際に、昨年度までの研究協力校で継続して活用したり、校内研究の中で記述内容を共有したりするなど、各校において自発的な試みもみられた。各校の実態に応じて柔軟に実施方法を工夫することができるので、研究協力校以外の小学校においても有効活用が期待できる。

4 アンケートの実施

本研究の検証の手段として、2校の教員を対象に、7月と12月にアンケートを実施した。

(1) アンケート項目

- ①センター指導主事や山梨大学の支援による学習会について
 - ②センター指導主事や山梨大学の指導・助言を取り入れた学習指導案検討、研究授業について
 - ③拡大校内研究会の実施について
 - ④「明日の授業に生かすシート」の活用について
 - ⑤校内研究への取組の姿勢（主体的に取り組んだか）について
 - ⑥センター研究協力校として取り組んだことについて
 - ⑦センター研究に関する意見・感想
- ※①～⑥は充実度・満足度の自己評価尺度として「4：高い」「3：やや高い」「2：やや低い」「1：低い」で評価し、⑦は記述で回答

(2) アンケート結果

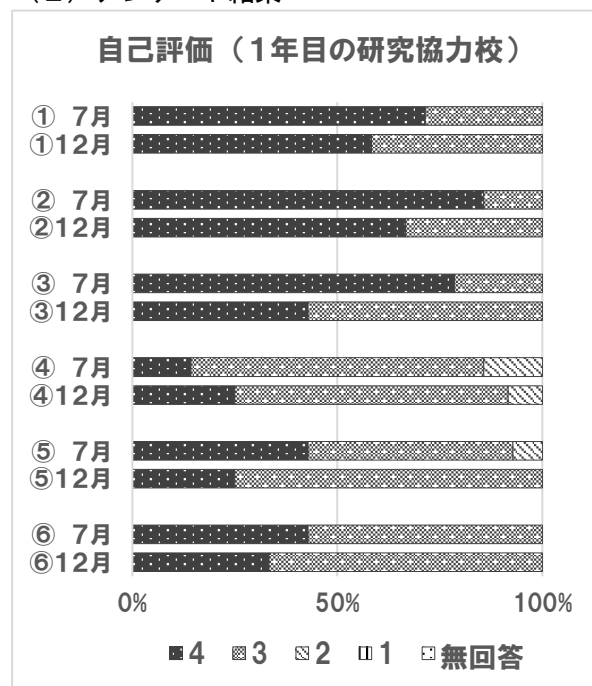


図1 充実度・満足度の自己評価

⑦記述回答より

- ・「明日の授業に生かすシート」を活用することによって、自分の授業を見直すよい機会となった。
- ・一人一実践に対する指導により、教職員の意識が高まった。
- ・学んだことを来年度に生かすために、より主体的に校内研究に参加し、考えていきたい。

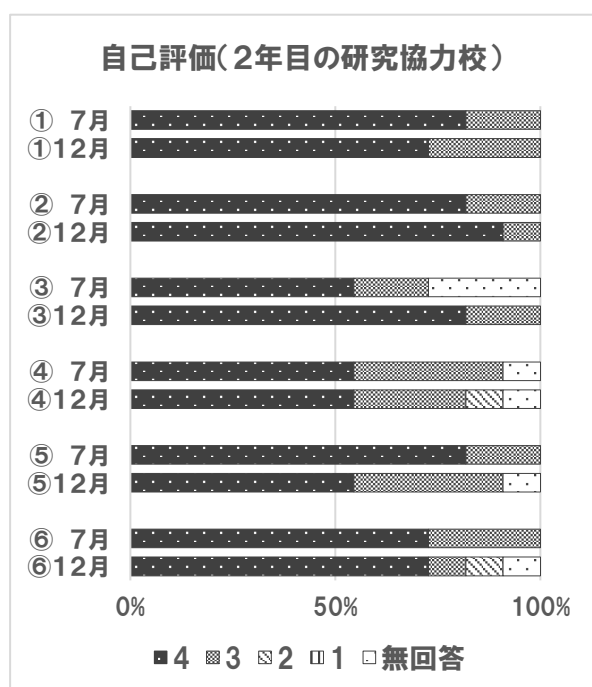


図2 充実度・満足度の自己評価

⑦記述回答より

- ・学習指導案検討だけでなく、模擬授業を行うこ

とで授業のイメージができた。

- ・センターや山梨大学からの指導助言を受けることで安心感があり、研究の深まりも生まれた。
- ・多くの指導主事が関わる利便性を広く県内にも伝えて、活用する機会を増やしてほしい。

VI 今年度の研究の成果と課題

1 成果

(1) 研究協力校における成果

研究協力校が挙げた成果の一つに、互いの授業から学んだことが挙げられる。

2校において、全学級担任が研究授業もしくは一人一実践授業に取り組んだ。その結果、多くの教員が学習指導案づくりに関わり、担当学年以外の学習内容を考える機会を得た。また、授業を見る機会や研究会に参加する機会が増えた。

教員のアンケートからは、「一人で悩まず、一緒に考えることができた」「授業を見合い、互いのよい部分を学んだ」「授業後の研究会で、課題点を共有し合えた」「授業を見る目や授業について語る力が付いてきていると実感している」と、学びや授業力の高まりを実感する様子がうかがえた。

研究授業や一人一実践授業に関わる取組から、教員一人一人の授業改善につながり、授業づくりへの意識が高まった。更には、学校全体の授業力向上につながり、「みんなが主役の校内研究」となったのではないだろうか。

(2) 有効な支援

研究協力校への有効な支援として以下の2点が挙げられる。

1点目は、研究授業から振り返り、個々の授業につなげる支援である。

2点目は、自校採点から分析して成果や課題を見だし、授業に反映させる一連の研究の流れへの支援である。

これらは、研究協力校終了後も、学校が取り組むことができ、また、研究協力校でない学校においても取り組むことができる、汎用性の高い研究の流れと言える。これらに取り組むことにより、教員一人一人の授業実践につながる、持続可能な校内研究になるであろう。

一方、指導主事が年間を通して、校内研究への支援を行うことは、研究主任として心強いと感想をいただいた。研究の進め方について気軽に相談

でき、学習会や研究授業において、専門的な指導助言や情報が提供されることにより、効果的で充実した研究を展開していくことができたという話が聞けた。このように、指導主事の継続的な関わりは校内研究や研究主任の支えになったといえる。

2 課題

以下の2点が課題として挙げられる。

1点目は、各学校が授業づくりに向けて、より主体的に取り組めるような手立てを考えることである。

2点目は、研究協力校が得た成果や有効な支援を県内の学校に広めることである。これまで、拡大校内研究会の実施や各種研修会において紹介する機会を位置付けてきたが、より多くの場で周知できるよう、効果的な方法を探っていきたい。

3 来年度に向けて

上記の課題解決に向け、研究協力校とより一層共通理解を図り、校内研究への支援を進めていく。

- ・新年度が始まり、学校において校内研究のスケジュールが確定する前に、管理職や研究主任と打合せる。
- ・1学期中に各種学力調査の分析方法を学ぶ学習会を位置付け、以降の校内研究に生かしていきけるようにする。
- ・「明日の授業に生かすシート」を活用し、教員の授業改善への取組につなげる。

これらの取組を通して、県内小学校の校内研究の活性化に寄与していく。

【引用・参考文献】

文部科学省 (H29 年告示) 小学校学習指導要領解説 算数編

国立教育政策研究所 H25, H27, H28, H30, R 3 年度全国学力・学習状況調査 報告書 小学校 算数

【研究協力校】

笛吹市立石和南小学校 校長 中楯 文仁
富士川町立鰍沢小学校 校長 勝俣 孝光

【山梨大学連携教育研究会アドバイザー】

山梨大学 客員教授 小林 玲子
客員教授 蘆原 桂 客員教授 嶋崎 修
教授 饗場 宏 准教授 中込 繁樹

【総合教育センター研究アドバイザー】

次長 鷹野 美香 主幹・指導主事 在原 直樹

授業研究の進め方

～学んだことを個々の授業に取り入れよう！～

指導案検討

- この単元（授業）で児童生徒に付けたい資質・能力が明確になっているか
 - ・研究主題、研究仮説等と結び付いている
 - ・児童生徒の実態（レディネス）を捉えている
 - ・児童生徒に付けたい資質・能力につながる学習課題になっている
 - ・教材の特性が生かされている
- 本時の目標を達成できる学習展開になっているか
 - ・児童生徒が学習課題を把握する手立てがある
 - ・自分の考えをもつための時間を確保している
 - ・友達と考えを交流する場面で話し合う内容を具体的に想定している
 - ・明確な板書計画を想定している
 - ・指導案の中に、児童生徒の姿が記述されている
- 育成したい資質・能力の実現状況を見取る学習評価になっているか
 - ・目標を実現した児童生徒の姿を具体的に想定した観点別評価規準を設定している
 - ・評価規準に対応した評価方法の工夫がある
 - ・学習評価を授業改善に生かすことを想定している（指導と評価の一体化）

研究授業

- 授業評価の観点が明確になっているか（授業観察の前）
 - ・校内研の研究主題、研究仮説等と結び付いている
 - ・全教員で共有している
- 児童生徒に付けたい資質・能力が付いているか
 - ・授業評価の視点を意識して授業を観察している

【児童生徒を
観察する視点】

児童生徒の学びを観察する

例）ノート記述
発言
反応 等

【教師を観察する視点】

指導する際の手立てや
工夫等を観察する

例）発問
板書
コーディネート 等

授業後研究会

- 授業評価の観点にもとづき授業を振り返っているか
 - ・協議の柱を明確にして話し合っている
 - ・児童生徒や教師の発言、ノート記述、板書等、具体的な事実にもとづいて話し合っている
- 全教員が主体的に協議に参加しているか
 - ・ワークショップ型等の手立てを取り、全教員が主体的に参加している
 - ・自分だったらどうするかを踏まえて発言している
- 授業の振り返りから、成果や課題、改善策をもてたか
 - ・一人一人が自分の授業に取り入れたい手立てをもつ
 - ・全校体制で取り組む授業改善に向けた手立てを共有する

↑ 個々の授業研究へ

- 授業研究で明らかになった成果や改善策を、授業に生かしているか
- 取り入れたことを振り返っているか
 - ・教師自身や児童生徒の変容を見取る
- 全教員で取り組んでいるか
 - ・校内研で実践を報告する時間を設け、個々で取り組んだことを共有する

例）一人一実践等の授業

指導案（略案）づくり

- この単元（授業）で児童生徒に付けたい資質・能力が明確になっているか
- 本時の目標を達成できる学習展開になっているか
- 育成したい資質・能力の実現状況を見取る学習評価になっているか

授業観察の視点

- 授業評価の観点が明確になっているか
- 児童生徒に付けたい資質・能力が付いているか

授業後の振り返り

- 授業評価の観点にもとづき授業を振り返っているか
- 授業の振り返りから、成果や課題、改善策をもてたか

学んだことを一人一人の授業に取り入れる ～「授業研究の進め方」の活用～

氏名 _____

授業後研究会


- 授業の振り返りから、成果や課題、改善策をもてたか
 - ・一人一人が自分の授業に取り入れたい手立てをもつ
 - ・全校体制で取り組む授業改善に向けた手立てを共有する

本日の授業研究で明らかになった「有効な手立て」や「改善策」は何でしたか？

個々の授業研究へ

- 授業研究で明らかになった成果や改善策を、授業に生かしているか
- 取り入れたことを振り返っているか
 - ・教師自身や児童の変容を見取る
- 全教員で取り組んでいるか
 - ・校内研で実践を報告する時間を設け、個々で取り組んだことを共有する

明日からの授業や一人一実践等で、どのように活用しますか？



今後、学校や学年として、どんなことを検討しておきたいですか？

